『ケータイ』の構図における寓意を求めて
―「拧巴」と「假話」をめぐって―

劉静華

An Analysis of the Allegorical Style of Cell Phone: On "ningba" and "Jiahua"

Jinghua Liu

ABSTRACT
This thesis explores of Liu Zhenyun's style of "ningba" and "jiahua" in *Cell Phone*, with discussion on allegory in the novel. The thesis also analyzes Zhenyun's reception of Confucian thought and Lu Xun's literary legacy and then argues that *Cell Phone* shows a way out of the present chaos by reviewing the last century.

キーワード：「拧巴」、伝達問題、「假話」、構図、儒教思想、魯迅精神

はじめに

『ケータイ』は、中国長江文芸出版社が 2003 年に発行した小説である。本作品が世に問われるとたちまちベストセラーとなり、２版（2007 年）、３版（2010 年）と重版され、テレビドラマ化、映画化と発展していった。作品における「拧巴」と「假話」が激しい世論を呼び起こし、「都会病を浮き彫りにしている」(注1)、「言語によって孤独感を表現したが、作品の根底に潜んでいるのは拭いきれない郷愁である」(注2)、「確かに私たちの生活及びその生存状態全体に脅威的な分析を打ち出している」(注3) などと批評された。

携帯電話は、今日の暮らしのなかでは欠かせない必需品と言っても過言ではない。そのため、伝達によるさまざまな社会問題の出現やその諸問題が人々の関心事となることなどは、いずれもライフスタイルの転換期における必然的現象と言わざるを得ない。通信技術が絶えず発展する今日の社会のなか、本作品が絶大な反響を巻き起こすことは容易に理解される。だが、『ケータイ』を描いた作者の意図は果たして伝達問題にすぎないものだろうか。「拧巴」と「假話」のメカニズムは複雑で難解である。故に本作品も伝達問題のみならず、多様なテーマをもつものと筆者は考える。

本稿は、上記の問題意識に基づき、「拧巴」と「假話」が構成する心理的、社会的要因を明らかにし、作品の構図及び祖母の死などの寓意を考察する。その考察を通じて、本作品が魯迅の批評精神を継承していることを示す。

Ｉ、「拧巴」と「ケータイ」

「拧巴」は、劉震雲 (注4) が作品の登場人物を語る際に口頭で使用した言語であり、中国河南省あたりの方言である。現代中国語の辞書には見当たらず、「拧」

と「巴」の複合詞で、ねじれ曲がること、屈折すること、不条理なこと、絡み合うことなどを表わす。また、人間と自然及び社会との不調和、ないし自家撞着を表わす場合もある。

（1）「拧巴」方法の由来

劉は、韓国外国語大学で開催された国際学術討論会（2010 年 11 月 18 日）に出席し、「文学と私が従事した文学」の演題において次のように述べた。

> 創作という道を歩んだ直接の原因は、少年時の友人に導かれたからだ。子どもの頃、作家になるとは一度も考えたことがない。
> その友人が殺人犯になる前に訪ねて行ったことがある。すると、「お前は創作してくれ」と言われた。「何故？」と聞き返すと「この世界を解明してほしい」とさらに言われた。こうして殺人犯の頼みを聞き入れて私は創作を始めたのだ（注5）。

この友人は、劉が軍人になり、故郷から甘粛省大戈壁灘の駐屯部隊に向かう列車の中で出会った軍の同期の少年である。彼はその列車の片隅でひたすら詩を書いていた。劉はそこで初めて詩に触れることとなり、その存在に強く引きつけられた。しかし、入隊三ヶ月後に彼は軍を辞め帰郷してしまった。劉は休暇で彼の家を訪ねた際に、彼がマルクスとエンゲルスの著作に埋もれ、その研究に打ち込んでいるのを目にする。「この世界を解明したい」と彼は言うが村の人々は「気が狂った」と言っている。後に恋愛するようになったが、相手の娘は彼が「気が狂った」と思い、別の人と付き合うようになった。すると、マルクスとエングルスの理論は暴力を主張するものだと思うと、彼はハンマーでその娘の交際相手を殺害してしまった。聴取を受けた際に、警察の一つの質問に三十分も費やして答え、その内容はすべて『資本論』に書かれていたものであった。

この経験はまだ少年だった作者に大きな衝撃を与えたに違いない。「マルクスとエンゲルスを信奉するこの国で、その著作を読む人が狂った」（注6）と 思われたことや「世界を解明したい」人が殺人を犯してしまったことなどについて、当然理解に苦しみ、深い思考に誘われるのであろう。その後、劉は軍人をやめ、大学、大学院で学び、文学の道を選んだ。友人の「拧巴」心理が象徴する今日の社会と向き合い、その名状し難い経験から、自身の創作の原点と方法を醸成したように思われる。

（2）「拧巴」方法の確立

朴宰雨は劉文学を三つの系統に分類している。

① 初期の作品を新写実主義文学としている。この時期の作品について朴は次のように喩えている。

劉震雲の小説は、彼にとって「ソ連解体」或いは「アメリカ軍がイラクに侵攻した」ことなどは大事件ではあるが、「子どもを幼稚園へ送る」ことや「妻の転職」などのことは、さらに大切だということを表わしている[注7]。

つまり、この時期の作品は生存を営むリアリティーに迫るものが多い。例えば、『塔舗』、『頭人』、『一地鶏毛』、『新兵連』などがその代表作である。池莉の『煩悩人生』、方方の『風景』、劉恒の『菊豆』などもこの手法を駆使している。いずれも社会の低層を成している庶民に視点を据え、その生存の実態をありのままに描写する。その煩瑣な日常を描くことによって、生存のリアリティーを反映しようと試みる。

② 新歴史主義の手法が見られる。

『温故一九四二』、『故郷天下黄花』、『故郷相処流伝』がこの時期の代表作である。既成の歴史の記載から民衆の暮らしを再現することによって、本来の事実を導き出し、その歴史に対するアンチテーゼ及び権威の固定化を阻もうとする。莫言、余華、蘇童もこの手法を用いる作家である。

③『一腔廃話』と『故郷麺和花朶』は、寓意性と幻想性を織り合わせた実験的作品である。

上記三つの系統には、劉のさまざまな方法が用いられたが、一貫した方法も見られる。それは「拧巴」である。『塔舗』の主人公で語り手の僕と愛蓮、『一地鶏毛』の小林夫婦、『故郷天下黄花』の孫と李の両家一族などの屈折した諸相、『温故一九四二』と『故郷相処流伝』の人物造形、『我叫劉躍進』の主人公劉躍進たちが生きた不条理な時代、いずれも「拧巴」した人間及びその社会の実態を浮き彫りにしている。劉はこの方法について、『ケータイ』のインタビュー（鳳凰テレビ局香港）において次のように述べている。

私が「拧巴」なのか、それともこの世界が「拧巴」なのか。当然、この世界が「拧巴」だと私は思っている。そうであれば、自分がこの世界にある程度まで「拧巴」された時、創作を通してその「拧巴」したものをもとに戻してみたいんだ。戻した後のものが新たに「拧巴」しているとしても、それはまた別の問題だと思う[注8]。

このように、劉は「拧巴」を生み出した社会の実態を再現しながら、それに対する認識及び打開策を模索しようとしている。この方法について馬俊山と李建軍はそれぞれ次のように指摘した。

当代の中国大陸は、道徳が破産し、価値が失われ、ポストモダンにおける普遍的な道徳への困惑、価値への危機感となんらかの類似性を持っている。このような環境下で書き上げた小説には、或いは小説によってこの社会を描

写し、その社会の人情と世故を叙述するには、この「拧巴」を用いる以外に良い方法はないと私は思う[注9]。（馬俊山）

彼はなんとしても人を「拧巴」に描いてしまう傾向があり、人とも化け物ともつかず、得体の知れないほどまで書いて、やっと気が済む。このような気ままなゲームはある程度の快楽が得られ、商業的成功も収められるのかも知れないが、高い代価も払わなければならないのだ。つまり、文学においてはなにも得られないのだ[注10]。（李建軍）

このように、馬は今日の中国そのものが「拧巴」し、劉は的確にその有りようを捉えていると解析し、「拧巴」方法はさまざまな象徴性を持ち、友人の死、現在の中国そのものを象徴すると考えている。一方、李は人間の正常の有りようがねじ曲げられたと拒絶し、『ケータイ』[注11]は商業性を持つ作品だと批判し、その文学の価値を否定する。筆者は、「拧巴」の描写法のみを理解する場合、李の指摘に共感し、劉の文学の出発点から考察すると、また馬の指摘に共鳴を覚える。だが、筆者の劉文学への視点は「拧巴」に対する解釈ではなく、「拧巴」状態を尽く理解する上で、そこからの脱却を模索する作者の姿勢に据えたい。例えば、『ケータイ』の場合、主人公厳が費のトーク番組の参与を願い、視聴者に儒教の中庸思想を説くところ、『一句頂一万句』（2009 年長江文芸出版社）の場合、主人公楊百順が儒学者汪と宣教師詹による論語と聖書との出会いなど、いずれも東西の教典を通じて、人々の「拧巴」状態への打開策を模索しているように思われる。この模索こそ作者の理念である、「創作を通してその『拧巴』をもとに戻したい」ということに違いない。となれば、劉の「拧巴」方法は、殺人犯の友人を受け継ぐこの世界の解明を模索する手がかりとなるのであろう。

（3）『ケータ』における「拧巴」

本作品は 3 章で構成され、各章は異なった時代の物語が描かれている。それぞれ独立しているように見受けられるが、厳と祖母だけはすべての物語に貫通している。それは作者の視点と狙いに気づかせてくれる重要な手がかりであり、本書を解く鍵である。

厳は幼い時に母親を亡くし、父親、祖母とともに厳家荘という寒村で暮らしているが、父親とは意思の疎通がなく、祖母は母親代わりの存在であった。成人後、彼は北京のテレビ局の司会を務めるが、不本意ながら妻を含めた女性問題に苦悩する。

本作品における「拧巴」は、祖母を除いてすべての登場人物に見られる。先に述べた李の指摘のように、「人とも化け物ともつかず、得体の知れないほど

まで」描いていた。なかでも厳と費はその状態が極まっている。二人はトーク番組によって儒教の中庸思想を視聴者に提示するが、自分たちはその思想に背馳する。

以下、厳と費の「拧巴」の有りようを見てみよう。

①費先生は孔子だ。私は役者なんだ。

本来は費先生に視聴者の生き方を指導して頂きたいのだが、彼ら自身はちっとも気にならないとは思いもよらなかった。国民の資質はこんなもんだな。魯迅も当時匙を投げたのだから。

②費先生によると、生きることは簡単なことだが、我々がそれを複雑にしてしまったのだ。或いは生きることは複雑だが、我々がそれを簡単にしてしまったのだ。

③厳君、私が言うまでもないが、時間があれば落ち着いて本でも読みなさいよ。知識が足りんといずれ失敗がくるからな。（注１２）

① では、厳は費を孔子に仕立て、視聴者の「拧巴」に向き合おうとするが、自分たちの「拧巴」を気に留めない視聴者になす術がなく、かつてこの民族の精神性に苦悩した魯迅に共鳴する。②では、費の「簡単」と「複雑」の中間に保たなければならないという説は、まさに儒教の中庸思想「不偏不倚」（《礼记译注》898 頁 杨天宇撰 上海古籍出版社 1997 年）である。③では、トーク番組の企画に参与し、国民の資質に失望し、厳を説教する費である。つまり、二人は民族性に痛烈な批評精神を示した魯迅に共感し、儒教の中庸思想を唱え、国民の資質の向上を図ろうとしている。しかし、厳、費の家庭環境から、かれら自身も多くの国民と変わりのないことが窺える。

厳と妻の于：

④誰だろう、こんな遅い時間に。誰だろうともう出ないよ。（厳）

そう、私が代わりに出るわ。（妻于）

やっと通じたね。また外で遊びやがったんだろうな。言っとくけど、2 時間ほど前に奥さんが電話を掛けてきてお前の居所を尋ねたんだよ。（費の電話）

今晩、費と一緒だと言わなかったかしら？（妻于）

外は寒いから早くお家に帰って。車の中で背中を噛んでしまったみたい。寝る時、下着を脱いちゃだめだよ。（伍のショートメール）（注１２）

費の電話に続き伍のメールが着信し、社会で流行する「假話」（虚言）による厳の言い逃れはこの時無用であった。彼は于に渡された電話を眺め、茫然自失するほかはなかった。国民の資質の向上を願うはずの名司会がついに妻に離縁される。しかし、その後、彼は愛人伍と結婚せず、大学教員の沈と交際するが、伍からの脅迫で二人の関係を断ち切れず、後に彼女の復讐で窮地に追い込

まれる。生中継中にセリフを忘れかけ、司会の座も危うくなる。儒教道徳、中庸思想の唱道者から乖離した厳の行為は、「拧巴」そのものを浮き彫りにしている。

費も同じである。現代の孔子と慕われ、常に周囲の人々を指導する立場の人が、ある日、女子学生との異様な関係が明かされた時、おそらく誰よりも彼自身がおのれの「拧巴」に途方に暮れたに違いない。

だが、本来の厳と費は良識を喪失し、意図的に妻たちを欺瞞した訳ではない。かれらは理念を持ち社会に貢献し国民の資質改善に奔走していた。しかし、気づけば「この世で最も卑劣な人」（『ケータイ』171 頁）というほど「拧巴」となっている。その「拧巴」は社会全体に蔓延する「假話」からはじまり、この「假話」現象は当然ながら個人の問題に止まらず、重大な社会問題である。

Ⅱ、 作品の時空及び伝達における「假話」

「假話」とは、人間間の正常な伝達手段が疾病化されてしまい、虚言を発することである。本作品ではことの流れに身を委ね、その場凌ぎに用いた言い逃れのようなものとして、使われているように読み取れる。

（1）三つの時空と歴史性の捨象

『ケータイ』の特徴と言えば、章立てに対応する三つの時空が際立つ。以下のように示せば、作品の構図が浮かび上がってくる。

<u>第１章―主人公の過去―第２章―主人公の現在―第３章―主人公の過去の過去</u>

下線部の三つの時空を繋ぎ合わせると、輪のような大時空を形成し、それが作品の構図として浮かび上がってくる。この構図に託された作者の意図はⅢ章で考察するが、先ずこの三時空を明らかにする。

①<u>主人公の過去</u>：この時期はおおよそ前世紀 50 年代末から 70 年代初頭である。厳家荘は手回し電話しかなく、交通も発達していない。その頃の人々は単純明快であり、虚言を言う必要もなかった。

厳は父親と祖母とともに幼年期と思春期を過ごし、牛三斤の新妻呂桂花に淡い恋心をもつ。

②<u>主人公の現在</u>：それから、30 年後の 20 世紀末から 21 世紀初頭では、物質文明が発達し、生存手段も多様化すると同時に、インターネットと携帯電話も普及した。

厳は北京のテレビ局でトーク番組の司会者を務め、妻于文娟、愛人伍月、離婚後の婚約者沈雪との関係に苦悩する。費墨とともに儒教思想を番組への導入を進めるが、彼ら自身がその道徳に背馳し「拧巴」してならない。

③<u>主人公の過去の過去</u>：時は逆戻りし、1927 年から始まる。この時期、厳家荘では一つの知らせが伝達できるまで２年間がかかり、電話のない時代であっ

た。人々は生存のために奔走し、１章の時代よりもさらに単純であった。
　この三つの時空は、ある共通点を持っている。それは現実世界の歴史性の捨象である。１章の前世紀 50 年代から 70 年代までは、歴史的事件の多発期である。周知のものを挙げると 1958 年の大躍進運動と 1966 年の文化大革命運動がある。厳の母親は「60 年に餓死」したと作中にあったが、その死は「大躍進」運動と関係があるのは間違いない。この時期の餓死者の多発は公認の事実である。そして、呂桂花が嫁いできた 1969 年といえば文化大革命の高潮期である。狂気に陥った毛沢東崇拝運動がこの国の隅々まで行われていた以上、厳家荘だけが免れることはない。２章の 20 世紀末から 21 世紀初頭も急激な社会変貌を遂げた時代であった。改革開放政策の導入やインターネットと携帯電話の普及などによって通信技術や生活手段なども多様化した。３章は厳の祖父母と曾祖父母の時代である。前世紀 27 年あたりに祖母が厳家に嫁いたのであれば、この時期は封建社会から近代社会への転換期であり、辛亥革命、五四運動、日中戦争、国民党と共産党の内戦などが続き、中国内外においての激動期であった。だが、この間の歴史的事件が厳家荘とは無関係であるかのように、作者は自身の小説に没頭し、厳一族とその周囲の人々の生存状態を穏やかな物語として淡々と叙述していく。いうまでもなくそれは作者が意図的に用いた方法である。即ち、乱世の革命と角逐の描写を消去することによって、生命の本質に迫ることができ、物語を人間の普遍的営みとして捉えることができるからである。

（２）「説話」と「假**話**」

　本作品は、人々が携帯電話を通じて絶えず「説話」（話すこと）を続け、その上、憚ることなく「假**話**」を言い、社会の「**拧**巴」、人の「**拧**巴」を生み出してしまうことが語られている。この「説話」問題はいわゆる伝達問題である。主人公厳の中年期を描いた 2 章は作品の時空における「現在」で、作品の主題を構成する部分である。１章と３章より紙幅が倍増し、登場人物の困頓とした「**拧**巴」状態が表象されている。人々は携帯電話を媒介に虚言の世界に陥り、厳も「假**話**」を日常的に使用しているが、後に自身の内部（私生活）も外部（社会生活）もともに瓦解する羽目になった。「假**話**」による伝達行為は、人々が最初に深く思考せずに行ったものだが、その結果、巨大な社会が蝕まれてゆく。しかし、人々はその危機を気にとめず延々と使用している。そのため、「街を歩いていると 90 パーセントの人が病んでいる」（p159）と厳、費が気づく。即ち、「假**話**」は組織化したウイルスのように強い感染力をもち、人間のメンタリティーを疾病化してしまう。このような社会問題に直面した作者は、伝達という行為の本質を追究し、人々の自省を喚起しようとする。

　君たちは、携帯電話でどれだけの無駄話と嘘偽りを言っているのだろう。中国語は本来簡潔な言語だ。今、皆が心にもないことを言う。携帯電話にどれだけ人に言えないことを隠しているのだろう。このままでは携帯電話が何時か携帯爆弾と成りかねない。いっそう電話の中の秘密を公開してはどうだ

ろう[注13]。

携帯電話の出現が発話行為をこれまでより増加させたことは否定できない。費が主催するトーク番組の企画会議中に電話の着信がやまなかった。その上、出席者が互いにその電話の内容を揶揄し笑い合った。費は、会議が中断されても平然と談笑する人々を目の当たりに思わず激怒した。しかし、この時の費の独白は言うまでもなく作者の視点で語られている。言語の膨張、虚言の乱用による発話行為に疑問を唱え、「假**話**」を媒介する携帯電話のあり方を問い正した作者は、同時にまた、この伝達行為の危機を意識しない今日の社会を憂慮し、何事も意に介さない「我々の文化の生態」[注14]を反省し、自身の創作について振り返る。

第一段階では瑣事をもって瑣事を語り、第二段階では複雑をもってこの世界を説明し、自分が感じたこの世界の感覚を表現しようとした。しかし、実際に今の段階となっては、自分の当時の創作は無駄話を言っているようで、すべて無駄話だった。この世界では、有用な言葉は一日 10 句を超えないものだ[注15]。

『ケータイ』に至ると、私は精神と物質の**契合点**を見つけたようだ。それは人間の「説話」（話すこと、伝達）という行為だ[注16]。

日々喧々囂々と発話に埋め尽くされている社会光景に直面した作者は、自身の初期の新写実文学を代表する『塔铺』、『一地鸡毛』、『官场』、中期の新歴史主義を代表する『故郷相処流伝』、『温故一九四二』などを振り返り、描写の煩雑さに気づく。「有用な言葉は一日 10 句を超えないもの」とすれば、現在の人々の「説話」行為は甚だ危険である。なぜなら膨張した言語には真実性が失われ、「假**话**」による虚構の世界が築かれ、現実の社会をよりいっそう「**拧**巴」させてしまうからである。『ケータイ』はその具体像として、厳と費の両家族及び二人にまつわる女性問題などを表象し、現実社会の困頓状態を反映した。

しかしながら、人々は何故「説話」行為に暴走したのであろうか。それは、豊かな物質社会と裏腹に空虚な心を癒すために違いない。先の引用からすると作者は「説話」という行為には、人間の精神世界及び物質世界の両面の性質が混在し、人間にとって重大な問題である、と考えているように見受けられる。そのため、「有一説一」（ありのまま語ろう）というトーク番組を構想し、厳の番組での司会者としての姿勢、また家庭での夫としての姿勢を通して、「説話」と「假**話**」の間で浮遊する彼の「**拧**巴」を浮き彫りにした。しかし、厳が用いた「假**話**」は、騙す目的というより、むしろその場凌ぎ、お茶を濁すようなものである。彼はもとより妻于と離婚しようと思っていない。離婚後沈と同棲するが、彼女を守りたいがために、子どものこと、伍のことなどを隠蔽してしまう。では当事者の会話を見てみよう

于との会話：

今どこ？夕食は家で食べます？
帰れないなぁ。午後演劇学院の講義があったから、番組の企画会議が夜に変わったんだ。

実際にこの時、厳は伍と車中で密会していた。
沈との会話：

貴方、なにしてるの？
トイレだよ
トイレってズボンをはいたまま？
誰に電話しているの？また伍？
いったいどれだけのことを隠しているの？（注１７）

この時、于の兄からのメールに返信していた。
費と妻の李の関係も同様である。現代の孔子と標榜されている費は、出会いサイトで談話を楽しむ妻を見て、「もういい年というのに、くだらない、くだらない」（p56）と言って呆れ返るが、その後、自身の女子学生との恋愛関係が暴露される。
厳と費は「假**話**」によって自らの虚構の世界を築いたが、自身の内部も外部もやがてその「虚構」によって崩壊することになるとは気づこうとしなかった。だが、現実が否応なしに押し迫ってきた。于と沈は、厳と伍の関係を知ると、彼から離れていった。伍も厳とのベッドシーンを携帯で撮り「有一説一」の司会者の募集に採用しろと脅迫し、厳の周辺の要人を次々と買収した。費も家庭と社会での立場が失われていった。二人は家庭が崩壊し、社会の信用もなくし、破滅を迎えた。しかし、先に述べた費の主催する企画会議を顧みると、厳と費が辿った崩壊の原因は「假**话**」に由来するが、その「假**話**」行為はかれらに限らず、今日の社会問題であり、二人はその縮図にすぎないのである。

（３）「假**話**」のメカニズム
厳は、着々と進めてゆく伍の復讐の前で、「暗黒は果たしてすべてを征服できるものだ（p151）」 と叫んだ。だが、その暗黒の病理を追及すれば、暗黒を培養した歴史と文化に遡らなければならない。三章の祖父と曾祖父の時代から「有一説一」の時代までの厳一族の百年間は、中国史上においては、封建社会から近代社会への転換期であり、挫折を繰り返す時代であった。辛亥革命、新文化運動、五四運動、日中戦争、大躍進、文化大革命、天安門事件などの諸事件は、この民族及びその文化を絶えず踏みにじってきたと言えよう。人々の固有の伝統文化への懐疑、生命本来の有りようへの忘却、精神の喪失感などは余儀なくされた。先に引用した馬俊山の指摘のように、「当代の中国大陸は、道徳が破産し、価値が失われ、ポストモダンにおける普遍的な道徳への困惑、価

値への危機感となんらかの類似性をもっている」。このような背景のもと、物質文明が発達し、インターネット、携帯電話による利便性が高まった時、人々は理性と本能の間で揺れ動き、社会倫理より快感のみを追尋し、「假**話**」の世界に陥った。

２章では、社会倫理に思い到る以前に人々は盲目的に「假**話**」へと暴走した。厳と費はそのため、「内部」から「外部」までの全人格の崩壊を辿った。通信技術の発達にともない、転換期の社会形態に戸惑う人々は健全な心から乖離していった。「假**話**」のメカニズムは、このような社会的外部要因のほか内部要因もあった。厳と費の家庭内の様子を見よう。

今、貴方の話を聞くのは、テレビのものだけですわ。
妻の話を聞くと、厳ははっとしたが、その後の二人の会話を考えると、いっそう緊張してしまう。幸いに二人ともそれに慣れてしまい、妻于もあまり追究しなかった。もっとも際立つのは食事の時であった。二人が囲んだ食卓は食べはじめてから終わるまでの間にお椀とお箸の音しかしないのだ。

費と妻李の関係も同じである。ネットの出会いサイトで夢中に話している妻を「くだらない」と指摘すると、

貴方は一日中私と話さないんだもの。ほかの人と話してもだめだというの？私を窒息死させるおつもりなの？（注１８）

上記の厳と費の家庭環境からすると、人間関係の基本的な場である家族は、かれらの場合すでに正常性を喪失し、事実上解体している。二人は心身を慰藉する温もりや心のふれ合いなどが得られず、内心の孤独感に絶望している。孤独を克服する問題に関しては、『一句頂一万句』では「一句」或いは「真話」（本音）を捜し求める旅を通じて語られた。本作品では「假**話**」の背後に見え隠れする、分かり合える交流を求めることに暗示している。事実、厳と費の「假**話**」は孤独の極限状態で行われていた。
厳の場合：

その晩、厳は会食していた時、胃の具合が急に悪くなり、予定より早く帰宅した。于は彼の帰宅に気づかなかった。厳は寝室で少し休もうと思ったが、入り口まで行くと、于がベッドの上でぬいぐるみの犬を抱いてむにゃむにゃと話しかけていたのを見た。小さい頃、笑うのを好まずよく泣いていた。父は南京のラジオ工場で働いていた。母は町内で湯沸かし器の番をしていたが、彼女が怒り出すと、よく石炭の燃え殻を掘るシャベルで私を殴った。おじが一人いたが色白で太っていて、なんと私に下心を持っていた。15 才の時……厳に言わなかった多くの昔話を今ぬいぐるみに語った。厳はそれらの話を聞いて妻に同情するというより却って恐ろしく思えた。彼はまたこっそりと家

を出て、外で一時間ほど散歩した後、再び家に戻った[注19]。

費の場合：

お互いに疲れたからではない。もう長い年月だが、話がどうしても合わないんだよ。
やはり農耕時代がいいよ。
当時は、すべてが徒歩であった。一度、都へ科挙受験の旅に出れば、何年間も帰れない。帰郷すると何を言っても受け入れてもらえたんだ[注20]。

厳と費は、世間ではもてはやされる有名人ではあったが、上辺の満足感と幸福感と裏腹に、不安、孤独、寂寞である。妻との交流が心身ともに断絶された時、「假**話**」を用いた。かれらは救いようのない孤独感に苛まれるなか、家庭の崩壊をまねくことを知りつつも自身の絶望感に挑戦した。厳は伍とのベッドインについて「乾きを癒す、消毒」と言い、費は女子学生とは「ベッドで手を繋いただけで、その後喫茶店で学問を語った」という（p155）。つまり、かれらは孤独であり、人間同士の分かり合える交流を渇望していた。
上記の考察を踏まえると、「假**话**」のメカニズムが浮き上がってくる。それは社会的病理と人間の孤独感との二重要因である。

Ⅲ、作品の構図における寓意
『ケータイ』の構図は、三つの時空によって「○」のような大時空を形成したとⅡ章で述べたが、その構図には作者の意図が込められているに違いない。何故なら、主人公の過去、現在、過去の過去が循環する「○」の大時空のなか、「現在」が作品の主題を構成していたからである。つまり、1章の厳の童年、3章の祖父母の暮らしが作品の背景として描かれ、2章の伝達問題が作品のテーマとして描かれている。それは「現在」の困頓状態を凝視し、そこからの脱却を模索する作者の意図ではないだろうか。主人公厳の叫びからそのように窺える。

この国のすべての人を代表して言う。我々はこれ以上、こんなにうやむやに活きてはならんのだ（p26）[注21]

この独白は、現状を打開し新たな生存形態、つまり未来を渇望している作者の姿勢が反映されている。事実、本作品についてインタビューを受けた際に作者は次のように述べた。

現在を見れば過去を知ることができ、過去を見れば未来を知ることができるのだ。[注22]

この「現在、過去、未来」こそ、過去をさかのぼり、現在を凝視し、未来を探求する構図である。その試みとして、前述に考察した厳、費の唱えた儒教思想が構想されたに違いない。だが、提唱者の厳と費もその倫理に背馳すると、

この方法の成立が不可能となり、模索の道が閉ざされる。作品中、新たな試みがまたあるとすれば、唯一「拧巴」していない祖母を形象したことが考えられる。実際に厳の帰郷が念入りに描写したのも祖母にスポットライトを当てるために違いない。何故なら厳と祖母は分かり合えるからである。例えば、離婚を報告すると「お前が言わなくても分かるのよ。離婚したといっても彼女はちっとも悪くない。悪いのはうちの子なんだよ」(注２３)と祖母は叱責しつつ、自分の父親と厳の父親をなくした時の悲しみを語り、「この話を今まで誰にも言わなかった」という。厳も「祖母の膝に伏しておんおんと泣いた」。二人は過去と現在を共有し、良き理解者である。しかし、祖母が死去したため、本作品の模索の道も獲得できずに断たれたのである。

これまでの考察を振り返ると、作者は「〇」の構図における一世紀という歳月を通して、「現在」まで彷徨い続けている人々を凝視し、その困頓状態の打開策を模索したが、魯迅と同様に国民の資質に絶望せざるを得なかったことが窺える。時は「〇」のように絶えず繰り返されてゆき、人類の生存形態も絶えず変化を遂げたが、国民の資質は改善されず、依然として「魯迅が匙を投げた」状態に停滞している。作品の三つの時空が構成した「〇」の構図は、作者のこのような意図が込められているように見受けられる。この観点については、『一句頂一万句』の構図も合わせて考察すると、なおいっそう明瞭である。『ケータイ』を受け継ぐかのように、主人公楊と血縁関係のない孫の牛は、一世紀の歳月を彷徨い続けていた。作者は楊に儒学者汪と宣教師詹を邂逅させたが、「拧巴」が極まる彼の現状打開を遂げることはなかった。後に孫の牛も彼の複写版であるかのような人生を送り、孤独の旅を繰り返していく。つまり、牛は祖父とは世代を隔て、現代生活を送っているが、「拧巴」と孤独のために彷徨い続けている点では楊と変わらなかった。いわば、この国の人々の精神性は一世紀来、変わりはないのである。

おわりに

本稿は、「拧巴」と「假話」を明らかにし、作品の構図における寓意を考察した。魯迅を継承する作者の思想が浮かび上がったと同時に、作品の未来への探求が未完のままで終わったことも明らかになった。「未完」とは、作者は「〇」の構図における「現在」の人々の「拧巴」を表象したが、そこからの脱却方法を読者に提示できなかったことである。しかし、一世紀の歳月を振り返り、魯迅の批評精神を痛感した作者は、本作品のテーマを未完のままにするのだろうか。『一句頂一万句』を読むと、そのテーマが引き続き語られていたことに気付く。儒学者汪と宣教師詹の人物造形から作者の更なる模索が窺える。そのため、本作品の然るべき研究は、『一句頂一万句』を姉妹編として考察すべきであるに違いない。その論考は本稿の続きとしたい。

付記：
本稿は、韓国で行われた現代文学国際学術討論会における口頭発表及び意見交換を踏まえた既発表論文が査読を経て新たに掲載されるものである。

【注】

（１）林蔚「抬头看《手机》低头过一地鸡毛勉强兴奋的日子」《中国青年报》2010 年 5 月 25 日
《手机》道出一种都市病——生活已然让人疲倦、冷淡，但虚幻的繁华和喧嚣已成为习惯，停不下来，甚至主动要求继续，于是服‘兴奋剂’也要自己把自己弄‘HIGH’。

（２）任民「喧嚣的《手机》沉默的乡愁」《北方新报》　2010 年 6 月 7 日
7 年后，看了刘老师的新作《一句顶一万句》，若有所思；再回看《手机》，才恍然大悟，刘老师写的是语言，表达的是孤独，但他深深埋藏在书里的却是挥之不去的乡愁。

（３）李敬泽「刘震云新作《手机》研讨会实录(2)」《新浪读书》2004 年 1 月 14 日
我想在韩非的时代，一个人说话难，可以不说，可以回家种地当隐士，在中国和世界现代化的时代，要不想手机控制了你的生活，把手机扔掉，我觉得可能需要的是 比韩非那个时代当隐士更大的勇气和更不可能。所以，在这个意义上说，《手机》这样的作品，确实对我们的生活，对整个的生存状态，提出了富有威胁的分析。

（４）　劉震云は、1958 年河南省延津県に農民の子として生まれる。1973 年軍人となる。78 年に軍隊を辞し、北京大学に入学し中国文学を専攻する。1982 年卒業後、農民日報新聞社に入社するが、1988 年さらに魯迅文学院にて修士課程を修める。1987 年以後創作を始める。《塔舗》、《新兵連》、《頭人》、《単位》、《官場》、《一地鶏毛》、《官人》などは、初期の作品である。
21 世紀以後の作品は、文壇での反響はもとより、中国全土を風靡し、次々と映画化、テレビドラマ化されていく。《一地鶏毛》、《温故一九四二》、《我叫刘跃进》、《ケータイ》などのドラマは、いずれも高い視聴率を獲得し、話題作となった。2009 年に出版された《一句頂一万句》も現在映画製作中である。劉震雲文学はすでに英語、ドイツ語、フランス語、日本語、韓国語、ベトナム語に翻訳されている。

（５）「文学和我从事的文学」韓国外国語大学　国際学術研討会論文集 2010、11、18　2－13 頁

我走上创作道路的直接原因，是一个少年朋友的引导。我小的时候，从来没有想到当一个作者。

在他没杀人之前，我去看他，他告诉我“你要写作”。我问为什么？他仍交待我把这个世界搞懂，我听了一个杀人犯的话，开始写作。

（６）同（注５）13 頁

（７）「重构庸俗小市民生活与中国现代史」同（注５）8 頁

刘震云的小说表明，对他来说“苏联解体”或“美军入侵伊拉”等虽然也是大事件，但“送孩子上幼儿园”或“老婆换工作”这类事情显然更重要。

（８）〈杨澜访谈录〉凤凰电视台 2007、12、12

是我拧巴还是这个世界拧巴？我肯定觉得是这个世界拧巴了，但是的话，当世界把我拧巴到一定程度的时候，我倒想试图通过写作，把拧巴的理儿再拧巴回来。至于我拧巴回来的理儿是不是另一种拧巴，我觉得那是另外一回事。

（9）馬俊山〈刘震云的“拧巴”: 丛生存到审美〉同（注５）59 頁

当代中国大陆道德破产、价值失范与后现代社会普遍道德困惑和价值危机，有着某种相似性。在此情境中写小说，或用小说描写这个社会，叙述其中的人情世故，我真不知道，除了“拧巴”之外，还有什么更好的办法。

（10）李建军 尴尬的跟班与小说的末路——刘震云及其《手机》批判

《小説評論》2004 年第 4 期

李建军 http://www.chinawrite.rcom.cn 2007 年 01 月 18 日

他倾向于抡圆了把人往“拧巴”里写，非得把人写得不人不鬼、不伦不类他才过瘾。虽然，玩这种任性的游戏，他也许可以得到有限的快乐，也许可以获得商业上的成功，但是也必须付出高昂的代价：在文学上一无所获。

（11）作品の引用などは、長江文芸出版社２００３年に発行したものによる。筆者訳。以下頁と原文を記す。

作品の概要：全書 3 章と構成されている。

第一章

1968 年、主人公厳守一は父親、祖母と辺鄙な山村に三人で暮らしている。三才の時に母親を亡くした。1969 年呂桂花が厳家荘に嫁ぎ、夫の牛三斤が炭坑で働いているため、彼女は電話を掛けに街へ出かけた。同行した厳は彼女に淡い恋心を抱く。二人は一日中奔走し、やっと手回し電話による伝言を発信した。1996 年、厳が北京のテレビ局で＜有一説一＞というトーク番組の司会者となる。＜電話＞という番組を企画し、この思い出

を回想する。

第二章

2000 年前後、厳は美貌の伍月と出会う。二人の関係を隠蔽するため、妻を欺かなければならない。しかし、伍のショートメールから二人の関係が明かされ、妻と離婚したが、後に交際相手の沈雪に、つきまとってくる伍のことが打ち明けられず虚言を言い続け、暴露される。さらに伍の脅迫によって司会の座も危うく。

〈有一説一〉のプロデューサーを兼任する大学教授の費は、「人生は儚くも苦しきもの、堕落する事なかれ」と人々を諭すが、彼自身は女子学生と恋愛関係に陥る。

そんな厳と費は、曾て魯迅も救える妙薬はなしと断念したこの民族を〈有一説一〉のトーク番組を通じて目覚めさせようと考えている。

良き理解者祖母が死去する。

第三章

1927 年、厳の曾祖父厳老有には 3 人の息子がいる。長男厳白孩は厳の父親である。1923 年、14 才の彼は父親の仕事を継ぐのを拒み家出をする。4 年後、厳老有は子ども達を独立させようと思い、知人に「家に帰るように」と厳白孩に言付ける。2 年後、厳白孩は帰郷するが嫁となるはずの娘がすでに弟の子どもの母親となっていた。電話のない時代であった。1929 年、曾祖父は朱家の娘を彼の嫁に決めた。30 年後、その娘は厳の祖母となった。

(12) 《手机》28 頁

①你是孔子，我是戏子。

本来想让老费教导他们如何生活，没想到他们自己倒不在意。民族的素质就这样，鲁迅当年都无药可救。

②《手机》160 頁

据费墨先生说，生活很简单，你把它搞复杂了；或者，生活很复杂，你把它搞简单了。

③《手机》31 頁

老严，我不是说你，没事坐下来看点书，知识欠缺，是会误事的。

④《手机》60 頁

谁呀，这么晚了。不管是谁，我都不接了。

我替你接。

你可算开机了。还在外面胡闹呢？我可告诉你，两个小时之前于文娟打我的电话找你。

你不是说，晚上和费墨在一起吗？

外面冷。快回家。记得在车上咬过你，睡觉的时候，别脱内衣。

（13）《手机》８５頁

你们在手机里说了多少废话喝假话？汉语本来是简洁的，现在人人都言不由衷。手机里到底藏了多少不可告人的东西？再这样闹下去，早晚有一天，手机会变成手雷。我看倒不如把手机里的秘密都公布出去。

（14）「刘震云：一万句顶一句 北京晚报专访」

《北京晚报》 2009 年 3 月 16 日

杨百顺跟私塾老师学过《论语》，也听老詹讲过《圣经》。可怕的是，杨百顺像我们许多人一样，他不是对一种世界的解释不在乎，他对两种解释都不以为意。

中国人很多，聚在一起人多势众，但分开的时候，个个又显得很孤单。不从宗教的意义上，单从生活的层面说，**这就是我们的文化生态。**

（15）「刘震云谈《手机》拧巴的世界变坦了的心」

新浪读书 http://book.sina.com.cn 2003 年 12 月 09 日

第一个阶段是用琐碎说琐碎，第二个阶段是用复杂来说明这个世界，来表达对这个世界的感受。但真正到现在这一段儿，我的创作心态，我觉着全是废话，一腔废话，我觉得世上有用的话一天不超过 10 句。

（16）同注（15）

我觉得到《手机》，我找到了一种精神和物质的契合点，就是人的说话。

（17）①《手机》51 頁

在哪儿呢？回来吃饭吗？

会不去了。下午去戏剧学院上课，剧组的策划会移到了晚上。

②《手机》118－119 頁

严守一，你干吗呢？

上厕所呢。

上厕所，你怎么不脱裤子呀？

你给谁打电话呢？是不是又给伍月？

严守一，你到底有多少事背着我呀？

（18）①《手机》34 頁

我现在听你说话，都是在电视上。

严守一倒吃了一惊。但从此对和于文娟说话就更紧张。好在两人都习惯

了，于文娟并不深究。最明显是吃饭的时候，两人同坐一张桌子前，一顿饭吃下来，只有碗筷的声音。

②《手机》55 頁

你整天不跟我说话，还不让我跟别人说呀？想把我憋死呀？

（19）《手机》35 頁

那天晚上，严守一在外面吃饭，突然感到胃有些不舒服，便提前离席回家。回到家，于文娟并没有发现。严守一欲到卧室躺一会，到了门前，发现于文娟，坐在床上，怀里抱着一头毛绒狗，正对着它喃喃说话。说她小时候不爱笑，爱哭；爹在南京一家无线电场工作，娘在街道烧大茶炉，娘发起火来，老用掏煤渣的铲子打她；她有一个伯父，长得白白胖胖，竟对他不怀好意，15 岁那年……许多过去没对严守一讲的话，现在对一头绒毛狗讲了。严守一听到以后，不是对妻子产生同情，而是感到 shen 得慌。他又悄悄退出了家，在外边溜达了一个小时才重新回家。

（20）《手机》155－156 頁

也不怪疲劳，多少年了，话总是说不到一块儿。

还是农业社会好哇/那个时候，一切都靠走路。上京赶考，几年不归，回来你说什么都是成立的。

（21）《手机》26 頁

我代表天下的苍生，再不能让我们这样不明不白地活着了！

（22）（同注 15）

“悲悯”啊，我觉得这都是特别无耻的词。我只是对这个民族有特别刻骨铭心的感受。这种刻骨铭心的感受，它的来源并不只是现实生活，还有两个：一种是看中国的书，再有话看中国过去的生活。看现在就可以知道过去，看过去就可以知道未来。

（23）《手机》79 頁

不用你说，我就知道，当初的事，一点不怪人家，怪自家的孩子。